

九・一一直後の米国単独渡航



中山とし子

(元日本語教師)

十一時十五分のテレビニュース速報を見ていた時、ニュージャージー州ピッツバーグ郊外で、ユナイテッド航空機が爆発墜落炎上。後に「九・一一」と名付けられた大惨事のちようど一か月後に、一人で渡米を実行した、その時の記録の一部です。】

【二〇〇一年九月十一日(火曜日)、ニューヨーク、十一日朝八時四十六分(日本時間十一日夜十時前) アメリカン航空旅客機ボーイング757が、マンハッタンにある世界貿易センタービルのツインタワー(一一〇階建て)のうち、ノースタワーに突っ込む。その18分後、ユナイテッド航空175便がサウスタワーに突っ込む。続いて、ニューヨーク十一日朝十時前(日本時間十一日夜十一時前)三機目のアメリカン航空77便がペンタゴンに突っ込んだ。更に続けて、日本時間十一日夜

耳の横で何かうるさいものが唸るので目を覚ました。エンジン音だった。徐々に自分がアメリカ行きの飛行機の中にいることを自覚する。三連シートの肘掛を上げてベッドがわりにした座席から起き上がり、窓のシャッターを上げると、恐ろしいように澄んだ星空であった。群青の空一面を、まるでダイヤモンドを敷き詰めたように星々が埋め尽くしている。これまで見たこともない美しい夜空を眺めながら、世界中がテロの恐怖におのっているこの時期に単身アメリカに渡る自分が、

誰か知らない他人のように思えて来るのだつた。

二〇〇一年十月十日。私は、ミシガン州アナーバーに住む三十年来の友人であるエイリン・ガッテン（日本古典文学の研究者）の元に、一人で向かおうとしていた。子育てが一段落し、日本語教師として人生の仕切り直しを企てており、その準備段階として、ミシガン大学の日本語教室を見学するのが第一の目的であった。当時五十一歳。今から二十年も前、世界中を震撼とさせた九月十一日の米国同時多発テロのちょうど一カ月後のことであつた。

我々の目に今も忌まわしく残る残像……。ハイジャック機がニューヨークのツインタワーに真横から突っ込む映像や、ペンタゴンの上に、ニュージャーシーの林の中に、無残に爆発炎上した旅客機の残骸。これらすべてを

ライブで見なければならなかったあの日。この一月後に単独渡米を計画していた私は、これで三十年来の夢も潰え去ったか、と胸が凍りついたのを思い出す。テレビは朝から晩までテロの映像を流し、翌日から世界の空の猛烈なキャンセルが始まった。出発の三日前、十月七日には、三十数パーセントの就航率になつていた。ぎりぎりまで迷いながらも結局決行することになったのは、自分のへそ曲がりの性格のせいである。ここまで十分生きた。子育ても終わった。それにこの非常時に、ノースウエスト機で単身アメリカに渡することは平凡な主婦である自分にとつて、ある種痛快な決断ではあるまいか、こう考えると、かえって冒険心が湧いてきて飛んでみようと思ふ心がついた。当日の関西国際空港は予想通り、ガラーンとした広い域内に人もまばらで、三〇名くらいの手荷物検査に二時間以上もか

かり、それでも人々は黙って辛抱強く順番を待った。

アメリカへの単独プチ遊学の目的は、主に三点あった。

- 一、ミシガン大学の日本語教室の見学。
- 二、当地のキリスト教会（アンドリュー・エピスコパル・チャーチ（St. Andrew's Episcopal Church））が行っている毎朝夕のホームレスへのミールサービスを体験したいこと。

三、ミシガン大学大学院図書館ハッチャーライブラリ（Hatcher Graduate Library）を利用したい、ということである。

結論から言えば、短い期間にも拘らず、大変実り多く充実した体験ができ、平時では味わえない興味深い現実にくつも遭遇した。

これらのすべてを紹介したいが、紙数の関係

で十分の一も書けないのが残念だ。

アメリカに着いて最初に意外に感じたのは、ここの人々があの悪夢のような攻撃に対して、日本ほど興奮していないという現実だった。まず、テレビは朝から晩までテロの映像を流してはいない。それよりも、大雨によるヒューロン川の氾濫のせいで一人の男性が行方不明になっている事の方が重要らしく、朝晩このニュースだった。エイリーンにしてからが、テロは遠いニューヨークの話よ、アーバーは戦略的に何もないからテロの標的にされるはずがない、と楽観的な言い方をした。それより、炭疽菌のことは、夫のチャールズとヒソヒソと話していた。この菌は微量でも殺傷能力があり、建物や飛行機の空調に撒かれると瞬く間に室内の空气中に広まり、飛行機を利用する者にとっては最重要課題だった。FBIは、テロ勃発からわずか二日後

の九月十三日には、テロの実行犯を、オサマ・ビン・ラディンを首謀者とするパレスチナ解放民主戦線 (DFJP) 18人と報道したが、アメリカの人々は、炭疽菌はDFJPとは無関係と
思っているらしかった。それは正しかった。

九・一一から七年後の二〇〇八年八月七日の日経新聞に、二〇〇一年の炭疽菌事件は、先ごろ自殺したメリーランド州感染症研究施設
のブルース・アイビンス研究員の単独犯行、と決定づける小さな記事が掲載された。普段大して新聞を読まない私の眼に、その時なぜその小さな記事が飛び込んできたのか、不思議な気がする。二〇二〇年初から始まった(一説には、武漢では二〇一九年にはもう始まっていたという) 中国を発症源とした新型コロナウイルスによる新型肺炎流行の波は、今年二〇二一年になっても、収束どころか全世界で変異種による爆発的流行の増大への脅威と

不安が急速に広がっているが、原初は武漢の感染症研究施設からウイルスが漏れ出たとの噂が出てしまうのも、可能性として、ない、
とは言い切れないからであろう。

日本での印象と異なり意外と思えた二つ目は、学生たちの真剣な勉強態度と真面目さである。映画の中のアメリカの大学生は、勉強などせず恋愛に明け暮れるイメージがあったが、Wikipedia(2006年)によると、ミシガン大学は全米州立大学の中でも合格難易度四位とレベルが高く、大学院の四割が他国からの留学生とのことである。成績もそうなら、同時に授業料も名門私立大学並みに高い。だから、自信にあふれているしプライドも高い。学生たちは外見的には地味であり、ほとんどの学生が、いつでもどこでも熱心に本を読んでいるか、ケミストリー棟では、数人で議論する場面をよく見た。当時の日本の

大学生がファクションの奴隷となつてゐる幼稚さと単純さを思い、将来この世代が国を動かす時代が来た時、世界と対等に渡り合えるのだろうかと何度も落ち込み、悔しくて寂しくてたまらなかつた。が、エイリーンのパートナーである元ミシガン大学教授だったチャールズ氏に言わせると、「今の学生はレベルが落ちた・・・」と、無念そうに眉を曇らせた。

日本語クラスと大学授業料

日本語クラスは五名の日本人の先生方の、主に初級クラス七クラスを参観させていただき、いくつかのクラスにはオブザーバーとして参加した。先生方はいずれも四十歳前後。日本で三年以上の日本語教師の経験を積み、更にアメリカの有名大学、コロンビア大学やカリフォルニア大学の大学院を修了しておられ、どなたも優秀さが際立っていた。同時に

学生の頭の良さにも感動した。日本語クラスには留学生が多かったが、彼らは一度の説明で理解するし、矛盾があれば必ず聞き返し確実を目指す。要するに、彼らは勉強に大変熱心だ。その背景には、母国から留学資金を出してもらつてゐるとか、例えばネイティブアメリカンでも州外出身の学生の場合、当時年間27,000USドルという高額な授業料がある。現在の円に換算すると、約300万円／年となるが、これは日本の私学の医歯系学部とほぼ同額である。当時の日本の国立大学文系の年間授業料は約50万円で、私立の理系は、平均すると年間約140万円だったから、ここの授業料は破格に高額なわけである。二〇二〇年のアメリカ大統領予備選挙において、民主党のサンダース候補が、若者の公立大学無償化と同時に、すでに卒業した人々の奨学金返済免除を掲げているが、借り

たものは返さねばならないアメリカにおいては、一生返済に追われ生活苦から抜けられない人々の問題が顕在化していたためである。この卒業後の奨学金ローン返済については、日本でも最近深刻な社会問題になっている。半面、アメリカの学生は、高い授業料を自分の責任で払っていると思えばこそ、必死に勉強するわけであろう。

テロの情報と日本の様子を知るために、毎日のようにバスで二十分の大学院図書館ハッチャーのアジアンライブラリに通い、日本コレクションコーナーで、一日遅れで届く日本の新聞に目を通した。恐らく数万点を蔵するであろう日本語関係の書籍は、日本の図書館と遜色ないほどの充実ぶりである。尚かつ、二十四時間オープンしていて、誰でも、行きずりの外国人であろうとホームレスであろうとフリーパスであった。当時の日本の大学図



ミシガン大学大学院図書館の正面入口にて著者

書館は、外部からの入館に身分証を必要とした。八階建てのその巨大さは、正面入り口に立つと眩暈を覚えるほどである。正面はDIAOのある広場に面し、ここがミシガン大学の中心にあたる。

ミシガン大学には扉も門もなく、町と大学が一体となっている。この中を、学生に交じってホームレスがうろついているが、学生たちは小虫に対するほどの一瞥もない。

ホームレスへのミールサービス

教会でのミールサービスに初めて参加したのは、着いて三日目の早朝だった。チャールズの運転するホンダアコードに乗り、大きな屋根を持つ石造りの美しい教会に着くと、すでに何人かの人々が立ち働いていて、鍋から温かい湯気が立っていた。

この頃、ホンダはアメリカで高い信頼を得

ており、チャールズは最近シビックからアコードに乗り換えたところだった。ホンダに乗ることは保有者の環境への配慮を表し、一種のステータスとなっていた。

集まってくるホームレスは毎回平均して30名くらいだが、この地域に大体100名くらいはいるだろう、とのエイリートの意見だった。食事の内容は日本のわが家より豪華である。生野菜やポテト、マカロニ、スープはもちろん、ハムソーセージから数種類のパン類、肉の焼いたものがあることもある。これらはすべて市内のスーパードから寄付だとのことだった。賞味期限が切れたり余ったりしたものを、コディネーターのランディが車で回収してくる。ランディ一人だけが専従者で、他はすべてボランティアだった。

ボランティアの割り振りなどはすべてランディがやっていた。ボランティアはそれぞれ



キリスト教会 (アンドリュー・エピスコパル・チャーチ)



ミールサービスにて。エイリーン（左端）とボランティアの方々

れの仕事が決まっっていて、自分の役割が済むときと帰る。だから、部外者に突発的に入って来られると迷惑そうだった。パンを配りながら観察していると、白人とアジア系が多く、毎回家族で鍋を持って来る中国人一家もいた。ここに来ることを思い出し、自分の足で来られる人はまだラッキーだ、とエイリーンが言った。ここには暖房も食べ物もあり、一日命を長らえることができるから、と。

さて、私にとって強く印象に残ったことの一つは、ミールサービスに行った日のエイリーン夫妻の食事のことである。極端に貧しいものである。ある日の夕食は、生春巻きの皮で野菜を巻いたもの一本と、パック入りのから揚げ2個。「今日のディナー」と彼女から手渡された時、理由は尋ねなかったが、人に施しをした後の人間の欺瞞心を戒める、宗教家ならではの行為ではなかったかと推し量って

いる。チャールズ氏は、この教会の司祭の一人である。

三週間のプチ遊学はあっという間に過ぎ、帰りの飛行機は、来る時の気楽さとは正反対の緊張の十二時間だった。ほとんどがカラードの女性たちだった往路と違い、帰路のアテナントは白人男性が異常に多く、女性も身長が高くきびきびしていた。航空会社の制服を着てはいるが、恐らく軍か警察関係者だったと思われる。座席の埋まり具合は、十月十日が30パーセントくらいだったのに対して、帰りの十一月一日は約70パーセント。どの人も本を読むかテレビに見入るかして周囲との接触を断ち、決して怪しまれないよう努めていた。搭乗してすぐチケットのチェックがあり、筋肉の張った目つきの鋭い男性アテナントが、チケットと見比べながら一人一人じつと顔を見つめたのは不愉快だった。狭い

座席で身じろぎもせず読書していた私には、十二時間があつという間に思えた。こうして五十一歳のプチ遊学は、いろいろな課題を残して無事終わった。あれから二十年経つ。アメリカは、異端児トランプ大統領から民主党のジョー・バイデン大統領へと移行し、アフガニスタンへの派兵打ち切り、米兵士引き上げが決まり、つけ入るように中東は、イスラエルとパレスチナ間の戦闘が再燃。未だ終わりの見えない混迷を深めている。

こんな中で、世界はCOVID-19。パンデミックの禍中にあり、二〇二二年五月現在、アメリカではワクチン接種が急速に進み、国民全体としての免疫力の高まりは、接種率数パーセントの日本とはくらべものにもならない回復への道を歩み始めている。

おわり

